

## 第四章 竜がもたらす洪水

前章では、竜が雨や暴風雨・雷雨を呼ぶと信じられていたこと、そして竜は場合によると梵鐘に変身すると想像され、梵鐘が竜との関係もあって雨乞などに用いられてきたことを確認しました。

このことを前提にしながら、本章では既に第一章の(一)や(一七)の伝説をはじめとして、何度か触れてきた洪水などの原因として竜が意識されてきたことについて、引き続き伝説を素材にして考察していきたいと思えます。

### (一) 辰野と樋口(長野県上伊那郡辰野町)

昔朝日村の荒神山が伊那の東西両山脈の間を繋いで居たために、諏訪湖は此処まで一ぱいに水を湛えて居った。そしてその中にヌシの大蛇が住まって居た。ある年大洪水の折、荒神山の途中が切れて湖水の水は一時に天龍川へ流れ出し、其の跡が次第に涸れてやがて平地になった。そしてヌシの蛇は居所を失くしてそれも此處で死んでしまった。辰野と云ふ名前はそのために来たのだと云つ

て居る。そして荒神山が崩れて水が流れ出した所が今の樋口だと云ふのである。――(岩崎清美『伊那の伝説』二三九頁・歴史図書社・一九七九)

伝説によれば、昔は荒神山が伊那の東西の山脈をつないでいて、諏訪湖は現在の辰野町のあたりまで水をたたえ、その中に主の大蛇がいた。ある年の洪水で荒神山の途中が切れ、諏訪湖の水は天龍川に流れ出し、そのあとが次第にかれて平地になった。大蛇はいる場所がなくなり、ここで死んだ。辰野という地名はそこから来ているという。いわば地名の成立の伝説です。

ここでも湖の主の大蛇と洪水とが、セットになって語られています。諏訪大明神が蛇体であったことは有名ですし、既に見た伝説のなかでも、明神様が大蛇・竜として語られています。ですから、辰野に住んだという大蛇は諏訪大明神そのもの、あるいは眷族かもしれません。

### (二) 辰野の由来(上伊那郡辰野町)

大昔、ここに大きな海があって底に竜が住んでいた。ある年の夏、大雨が降って大水が出て一角がぐずれ、海の水が流れ出してだんだん水が少なくなり、底が見えるくらいになった。そのとき一天にわかにかき曇り、竜巻

きが起きて竜が天へ上って行ったという。水がひけてしまうと海は一大野原になった。それからこのことを竜野（辰野）ということになった。―（『長野県史』民俗編・第二巻（三）六一―六頁・長野県史刊行会・一九八九）この伝説は先の伝説と同じものです。また第二章の（二）

（二）とも共通性を持ちます。ここでは大雨が降って、大水が出てから、竜巻が起きて竜が天に上ったということになっていきます。各地に竜が天に上る時には大洪水を起こして、その力を利用して天に上るといふ伝説が伝わっています（『日本伝説大系』第一巻二二頁・みづうみ書房・一九八五、同第八巻一〇〇頁など）。この伝説はそうしたものに つながり、この洪水が本来的に天に上ろうとする竜によってもたらされたのではないかということ想定させます。

これまでの話で、諏訪明神と竜との関係が深いことについて触れましたが、ここで念のためにそうしたことを示す伝説を確認しておきたいと思えます。

### （三） 尾掛松（諏訪郡下諏訪町）

うんと大むかしは、神様の世の中だったちゅう。その

ころの神様たちは、一年にいっぺん十月になりゃあ、日本中から、ひとり残らず出雲の国（島根県）に集まっちゃ話し合いをしただと。日本中の神様が、日本のほうぼうを、るすにするもんで、十月のことを、神様が、いねえちゅうことから、神無月というだつて。

出雲に集まる時、神様たちは、それぞれいろんな姿になって、でかけただつて。諏訪のお明神様は、うんとりっぱな竜の姿になって、でかけただつちゅう。

ある年の十月の神様の話し合いの時だった。日本中から集まった神様たちが、口をそろえて、お明神様に、「諏訪のお明神様。お明神様の姿は、いつも、頭だけしか見えないが、体や、尾は、いったいどこにあるだね。」って、きいたつて。そしたら、お明神様は、ハッハッハッと笑つて、

「おれの体はなあ、この家を七巻半して、そして、尾は、諏訪湖のそばの、高い木に掛けてあるぞえ。」

って、すまして、こたえたつちゅう。

「へえ、この家を七巻半もして……尾が、諏訪湖のそばの高い木に。」

って、まわりの神様たちや、目を白黒させて、たまげたつて。体が出雲から、諏訪湖まで続いているつちゅうこと

は、いまの中国地方の島根県から、近畿地方をこえて、そして、諏訪湖まで、えんえんと続いているちゅうことだ。だいたい日本の国の長さのはんぶんちかくになるもんで、とてつもない、でっかい竜ということになる。日本中の神様が、びっくりするのもむりない。神様たちは、青くなつて、

「お明神様。はるばる信濃の諏訪から、出雲までは遠いので、これからは、話し合いにこなんでもうござい。話し合いのようすや、きまったことは、こちらからでかけて、おしらせにまいますで。」

「そりゃ、おありがたい。そうしてくりよ。」  
「お明神様は、でっかい声でいってから、みるみるうちに、黒雲にのつて、諏訪湖へかえつて、深くもぐつたちゅう。」

そのあと、諏訪には、十月も神様がいるもんで、神無月ちゅうもんはないだつて。

また、お明神様が、  
「尾は（大和）諏訪湖のそばの高い木（高木）に、掛けてあるぞえ。」  
つて、いったことから、そのあと、大和（諏訪市大和）



尾掛松

と高木（下諏訪町高木）という地名が、生まれただつて。尾を掛けた高い木は、いまも高木に、尾掛松として残っているぞえ。―（竹村良信『諏訪のむかし話』一五七頁・信濃教育会出版部・一九八一）

伝説の世界では、諏訪大明神の姿は大きな蛇、竜だったのです。そしてこの時に竜が尾を掛けたという尾掛松は現在も存在しています。  
諏訪信仰の元になったものは何かと言うことに関しては、様々な説がありますが、その中から竜に関係しそうなもの

だけを確認しておきましょう。宮地直一は諏訪地方の原始信仰として、居住民の環境を基調として自らに発達した自然信仰の中に、山と水の崇拜、石と木との崇拜、雨と風との崇拜、竜神信仰を挙げています。そしてその最後の例としていわゆる泉小太郎と甲賀三郎の伝説に触れ、後者では「神道集」に収める諏訪縁起の竜神の問題。また「諏訪大明神画詞」に明神が竜の形にて現われたと出てくる事などを示しています（宮地直一『諏訪史』第二巻前編二二頁以下・信濃教育会諏訪部会・一九三二）。金井典美は諏訪神社が非常に早い段階から「蛇を象徴動物とする水神」として中央政府に認識されていたのではないかと指摘しています（金井典美『諏訪信仰史』四頁・名著出版・一九八二）。こうした指摘でもわかるように、諏訪の明神様が竜の姿をしていた事、竜神様が水の信仰と深くつながっていた事は疑いありません。

再び水と関係の深い竜の伝説に帰りましょう。上伊那郡長谷村には次のような大蛇に関する伝説があります。

(四) 黒河内長者屋敷（上伊那郡長谷村 黒河内）

黒河内門気坂にさしかかる所一帯を長者屋敷と呼ぶ。

昔、この地に長者の住居があり、その長者に一人の美しい娘がいた。ところがこの屋敷に毎夜の如く遊びに通う若者があって近郷近在の評判となった。そのうちにその若者は戸倉山池の谷山中に棲む池の主、即ち大蛇の化身であるとの噂が伝わった。娘は真偽を検めようと、ある夜男の油断をうかがい、着物の裾に針を刺して帰した。ところが、次の夜若者は姿を見せず、天地の震動せんばかりの大暴風雨となり、たちまち三峯川は大洪水を起こし、翌朝大蛇の屍が激流を流されてゆくのを見たという。——『長野県 上伊那誌』第五巻民俗篇上一四四七頁・上伊那誌刊行会・一九八〇）

長谷村の三峰川にかかわる伝説です。長者の娘のところに通う若者があった。彼は大蛇の化身であるという噂がたつたので、娘は真偽を確かめようと、男の着物に針を刺して帰した。次の日若者は姿を見せず、天地が振動するような大暴風となり、三峰川は大洪水となった。翌朝大蛇の屍が激流に流されていくのが見られたという内容です。

伝説の筋からして、この時の洪水が娘に針を刺された大蛇によって起こされたことは確実です。ここでも大蛇＝竜は大暴風を起こす特別な能力をもつとされています。そして洪水とともに、ここでは屍ではありますが、竜が流れて

いったというわけです。これまで何度も触れてきたことからも明らかのように、竜が水害の原因をなしているという理解があったのです。

#### (五) 熱田神社と大蛇の骨(長野県上伊那郡長谷村)

昔日本武尊が東夷征伐の帰りに、甲斐の酒折宮から山坂を越えて美和村の溝口へおいでになつた。その頃三峰川の上流に大蛇が住まひ、折々出て来て人を害し、百姓の難儀は一通りではなかつた。尊は此の話しを聞き召して大へんに気の毒に思はれ、ある日噂のある川上へ行って見ると、案のじよう大蛇が鎌首を挙げて尊をただいと呑みと向かつて来た。尊は直ちに剣を抜いて立ち所に此れを退治なされた處、大蛇の血が河原を真赤に染めたと云つて、今其處を赤河原と称んで居る。百姓達は其の後尊の恩沢を慕ひ、此處に尾張の熱田神社を勧請して立派なお宮を建てた。その時境内の樺の大樹の下から大蛇の白骨が現はれたので、一しよにお宮に納めてお祭りをした。今日お宮の宝物となつて居るのが即ちそれである。(岩崎清美『伊那の伝説』八五頁)

これは日本武尊にかかわる伝説です。三峰川の上流に大蛇が住い、時々出てきて人に害していた。日本武尊がそれ

を退治した。このために大蛇の血が流れたので、今その場所を赤河原と呼んでいる。村人たちは彼の恩を慕って、ここに熱田社を勧請したお宮を建てたが、そのとき境内から大蛇の白骨が出た。大体こういう筋です。

先に見た伝説が象徴的に示しているように、三峰川は度々水害をもたらす荒れ川です。その上流、水の出でくる場所に大蛇が住んでいたのです。ですから時々出て人に害をなしたという蛇の行為は、あるいは洪水のことを意味しているのかもしれない。

#### (六) 悪い滝の主を退治した勇士(下伊那郡喬木村)

瀬戸の滝の主は大蛇でした。水の底の渦の中から出てくる大蛇の姿は大変恐ろしく、このため人々は決して瀬戸の滝には近づきませんでした。大蛇は毎年八月になると大水を出して阿島の水田を流してしまふのでした。阿島の人々はぜひこの大蛇を退治してしまいたいと思い、毎年勇士が出かけて行ったが、どうしたものか一人も帰って来る者はありませんでした。ところがある年のこと、旅の武士が通りかかりました。その武士は腕が強そうに見えたので、村の人々は「大蛇退治を頼んどころ」「お任せ願いたい。必ず退治して進ぜよう」と引受けてくれま

した。翌朝、武士は瀬戸の滝へと向い大蛇を退治し戻って来ました。武士は大蛇を退治した様子を村人に話しました。村人は感謝し武士をもてなしました。後になって、この武士は上郷の野底山の姫宮でヒヒ退治で有名な岩見重太郎であることがわかりました。それからは大水もなくなつて阿島の水田は秋になると稲穂が黄金の波を打つようになつたということです。―『喬木村誌』下巻七九〇頁・喬木村誌刊行会・一九七九

この伝説は、瀬戸の滝に住んだという大蛇にまつわるものです。この大蛇は毎年八月になると、阿島の水田を流してしまふので、勇士を頼んで退治しようとした。強そうな武士を見つけて依頼して引き受けてもらい、大蛇は退治された。後に、退治したのは岩見重太郎であることがわかった。それからは大水もなくなつたというのです。

この話では大蛇が洪水の原因として挙げられています。必然的に大蛇を退治すれば、洪水はなくなり水田は流されなくなりまふ。これまで述べてきた、大蛇が洪水をもたらすのだという理解がここにもみえます。

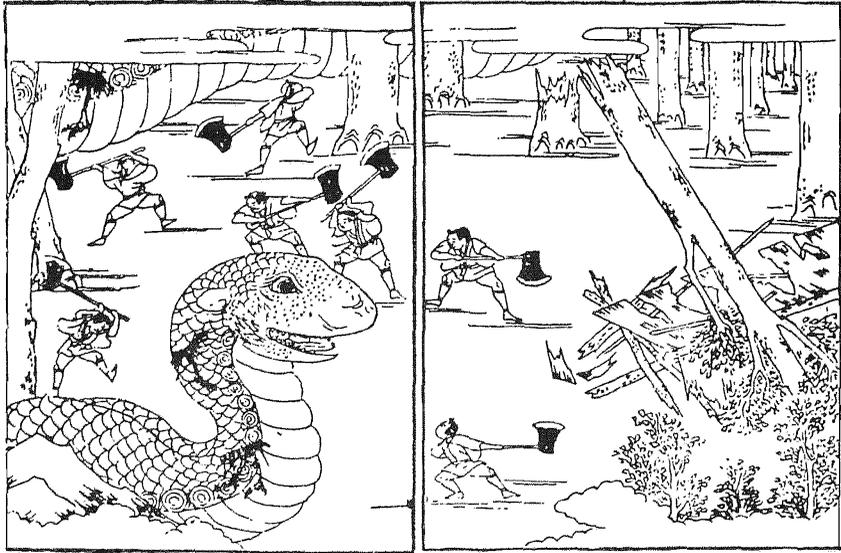
#### (七) 池口の大蛇 (下伊那郡南信濃村)

遠山郷の池口は、大昔凡そ二、三千年前までは池であ

り、大蛇が主として住んで居た。明神様の主であった。下の方の地ばんの弱い処が大地震か何かのはずみで崩れ、池が一挙に押出して、大島、漆平島、屋の島、松島七島が其の時出来たと云伝えられ、大蛇は其の時諏訪湖に上つた。然るに池に居た大蛇を祭る事になつたのは、池の底に大蛇のかくれ場が有つた。これは大事と言うので、諏訪明神として底の処に明神様として社を造り、現在も祭り続けている。―『高齢者の語り 第一輯 ふるさとへの伝言』一〇七頁・南信濃村教育委員会・一九八三

既に第二章(一)以降の伝説で触れたように、諏訪湖の主は、そのまま諏訪大明神であり、その体は竜の姿をしていたとされています。この伝説もそれに関わります。遠山郷の池口は、大昔は池で、大蛇が主として住んでいた。大蛇は明神様であった。たまたま下の方の地盤が弱いところが崩れて、池が一挙に押し出した。この時に大蛇は諏訪湖に上つたということです。

ここでも池が一挙に押し出したことと、竜の移動とが関連付けられています。池の主は、諏訪大明神である大蛇だということです。これまで見てきた伝説の内容との重なりが見て取れるでしょう。



『遠山奇談』に見える大蛇（山村書院版）

(八) とうちやげの池（下伊那郡天竜村）

下伊那の南端神原村字唐沢の奥の入り、俗にトウチャゲと呼ぶ所に昔大池があった。ヌシの大蛇、時々出で、水の出口を塞ぎ、そのために河の水の干上がることが度々あったので、その河のある所を、から沢と称ぶようになった。ある年大雨の時、池の堤が流れて河水汎濫、池の水がなくなってしまった為に大蛇は居所を失ひ、深見の池へ逃げて行った。

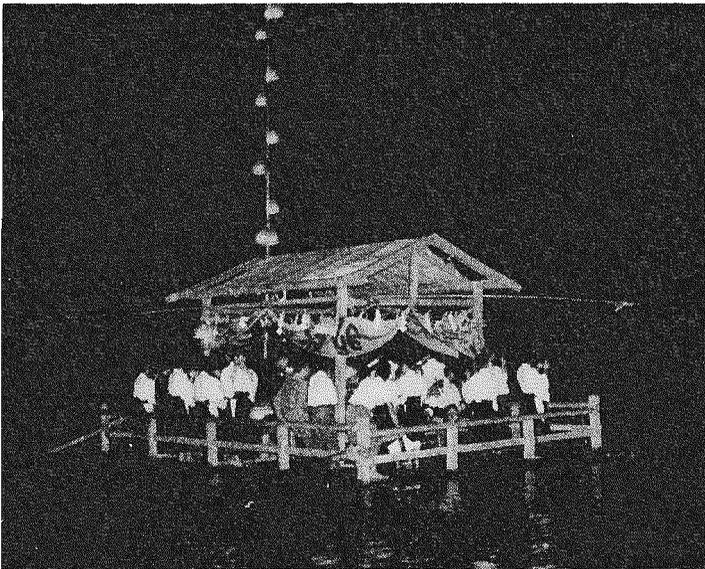
深見の池へヌシが来てから、近くの寺では鐘を撞くことを止めた。鐘の音を聞くとヌシが暴れ出すからだと言つて居る。―（岩崎清美『伊那の伝説』一〇二頁・歴史図書社・一九七九）

天竜村神原字唐沢の奥の入のトウチャゲに大池があった。この池の主の大蛇は時々水の出口をふさいだために、川の水が干上がることがあったので、その川のあるところをから沢と呼ぶようになった。ある年の大雨で、池の堤が流れて、川は大氾濫をした。池の水が流れてしまったために、住むところを失った大蛇は、深見の池（阿南町）へ逃げた。深見へ大蛇が来てから近くの寺では、鐘の音を聞くと大蛇が暴れだすからと鐘をつくのを止めたという内容です。前

半はから沢の地名由来、後半は深見の池の近辺で鐘をつかない理由説明になっています。

この大池の主は、川の水源に住し、川の水を出したり止めたりする力を持っているのですから、明らかに水を司る神様です。この大蛇が他所へ移動するに際しては大氾濫が契機になっています。竜野の竜は大洪水で天に上りました。遠山の大蛇は池の水の押し出しで諏訪湖に移りました。大體もといった場所より広い場所、もしくはもっと良い条件の場所に移っているわけです。この伝説でも唐沢の奥の大池より、深見の池の方が広くて大きいので、そちらに大蛇は意図的に移った可能性があります。その際に洪水が引き起こされたわけです。やはり洪水の原因は大蛇⇨竜と考えられています。

このことに関係して、鐘をつかない原因が考えられます。既に触れてきたように梵鐘は竜の化身であり、これを利用して雨乞も行われてきました。ですから鐘を鳴らすことはそのまま、深見の主が大雨を降らす、洪水がやって来るということにつながっていたのではないのでしょうか。それだからこそ、鐘をつくのが忌まれたのだと考えられます。



深見池の祇園まつり —池の主をなぐさめる水まつり—  
（『山の湖』信濃毎日新聞社刊より）

(九) 大蛇が池 (下伊那郡天竜村)

平岡村字宇連の今小学校のあるあたりは昔は大きな池で、青く湛へた水の底には大蛇が住むと云はれて人たちは怖がつて居た。ある年大地震が起つてその池の堤が崩れた時、ヌシの大蛇は池を抜け出て、和知野川を下つて天龍川へ出て、河の流れを遡つて行つた。その時は水の上に大きな横波が打つて、大蛇の背中からの夕陽にきらきらと金色に光つたと云ふ。

天龍川を上つた大蛇は天下條村の深見へ行つて、其所に大きな池を作り、それから其の池に住むようになつた。今の深見の池が即ちそれである。——(岩崎清美『伊那の伝説』一〇六頁・歴史図書社・一九七九)

この伝説も前のものに類します。平岡小学校がある辺りは昔は大きな池で、水の底には大蛇が住むといわれていた。ある年大地震が起つて池の堤が崩れたとき、大蛇は池を抜け出て、天龍川に入り、深見の池に入った、とのことです。基本的には前の伝説と変わりません。

(一〇) 先途のお池の主 (長野県下伊那郡天竜村坂部)

むかし先途つてうとは、三軒あって、場のでえら(平ら)のいいとこだった。

そこに池があつて、先途のある娘が、毎朝その池を鏡にして髪の毛をすいておつた。

そこを先途のお池の主が見ておつて、この娘をどうしても嫁にしたいと思うようになった。そこでお池の主は、蛇の体を人間の格好に変えて、この娘と愛し合うようになった。

ところがあるとき、この二人はひよんなことで仲が悪くなつてしまつた。お池の主は怒つて、この娘をお池に引っぱりこんだつて。

お池は荒れたくつて、一面にナギ(地すべり)になり、池はなくなつてしまつた。そのときには、ナギの石が、この蜂山越えて、富山の太谷つてとこまで落ちたつて。この虫川も、それまではずっと浅かつたそうだが、それからはおそろしく深くなつて、今ではずうと下を水が通つとる。先途に三軒あつた家も、ナギで流されて、一軒きりになつてしまつたつて。——(『長野県下伊那郡天竜村 坂部民俗誌稿』一二二頁・長野県史刊行会・一九八五)

同じ天竜村に残る伝説です。昔先途には池があつた。娘がその池を鏡にして髪の毛をすいた。池の主の蛇はこの娘を嫁にしたいと考え、若者に変身して愛し合うようになった。ところが二人は仲が悪くなり、池の主は娘を池に引き

込んだ。池は荒れ、一面に地滑りが起き、池はなくなってしまった。付近の虫川はこの時から深くなり、先途に三軒あった家も一軒になった。

伝説は虫川が深くなったことと、先途の家数が少ない説明になっており、その理由は池の主の蛇が原因でナギが起きたということになっています。地滑りの原因は池の水が流れたためです。これは蛇抜け災害ということができましょう。

これまで見てきた伝説などから、大雨をもたらすことができる、池や川などの水を統御できる神の化身として大蛇Ⅱが考えられていたこと。そしてその水を統御する能力のゆえに、洪水も竜が引き起こすと考えられていたこと。竜が洪水を引き起こす理由としては、竜の個人的な人間との関係とともに、竜そのものが住家をかえたり、天に上ろうとするようなときもあると考えられてきたことがわかったと思います。

もし洪水や蛇抜けがこのようにして引き起こされるのだとすると、その対策は竜に対処するものでなくてはならなくなります。ともかく、天竜川沿いに洪水などは竜がもたらすのだという考え方が色濃くあったことは確実です。

## 第五章 水害への対処

これまで、天竜川沿いの水害について、伝説を素材にして考察してきました。では、天竜川沿いに住んだ人々は水害にどのようにして対処しようとしたのでしょうか。現代では治水といえば堤防の構築などが主体です。しかしながら、前章で見てきたような、竜Ⅱ大蛇が水害の原因だというような考え方が強かった時代には、堤防以上に重要だったのはそうした竜を、どのようにして押えるかということだったと推察されます。そこで、最後に同じく伝説などを通じて天竜川沿いの人々がいかにして水害を避けようとしたかを、主として住民の精神的な面に光を当ててみたいと思います。

### 「水神を祭る」

水害が水を司る神である竜によって引き起こされるといふことならば、水害に対処するには私達とは異なる世界の住人である竜をも従えうる力のあるものが必要になります。